



サハラ砂漠のキャラバン・ルート：その歴史的展望 (古代)

南里, 章二

(Citation)

兵庫地理, 35:20-31

(Issue Date)

1990-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002367>



サハラ砂漠のキャラバン・ルート

—その歴史的展望（古代）—

南 里 章 二

1. サハラ戦車¹⁾ルートと岩絵の正体

有名なサハラの岩絵の存在は、Tassili-n-Ajjer を行き交う商人たちには古くから知られていた。サハラ砂漠に奥深く入り込んだヨーロッパ人による最初の発見は、フランス領西スーダン駐屯部隊「ラクダ騎兵の中尉ブルナンが治安偵察の道すがら、タッシリ・ナジールのとある深い溪谷に入り込み、フォール・ポリニャックの陸軍屯所南方のイガルガレンと呼ばれる盆地に抜けた年」¹⁾ 1933年のことである。この後発見されたフェザンの岩絵をも含めて、サハラ全体に広く分布し、またほぼ等間隔に切れ目なく続いているのが2頭ないし4頭の馬に引かれた二輪の戦車の岩絵である。この岩絵から、地中海からニジェール川に至るサハラ砂漠縦断のキャラバン・ルートが存在するという仮説は、ゴートイエ、グラジオーシらによって提示されていた。²⁾

このタッシリ・ナジールの岩絵が、フランスの考古学者H・ロートによって、本格的総合的に調査されたのは1956年のことである。

すでにタッシリ・ナジールの岩絵の中に計8点の戦車の岩絵を写しとっていたH・ロートは、地中海側のトリポリタニアからニジェール川北部のアドラル・デ・イフォラス間に点在する200近い戦車の岩絵を結ぶルートを暫定的に次のように指摘した。³⁾ (図1参照)

まずシルト湾沿岸、現在のトリポリあたりを出発し、Oued Zigza (11), Oued Massouda (12), Oued Gher (1), Oued El Had (2), Djebel Ben Ghena (2) を経て、タッシリ・ナジールの Oued Djerat (6), Tamrit (1), Tiror (1), Tamajert (4), Ahararar (2), Amazar (多数), ホガールの Hirafok (4), Oued -In- Daladj (3), Tit (4), Aguenar (3) タッシリ・デ・

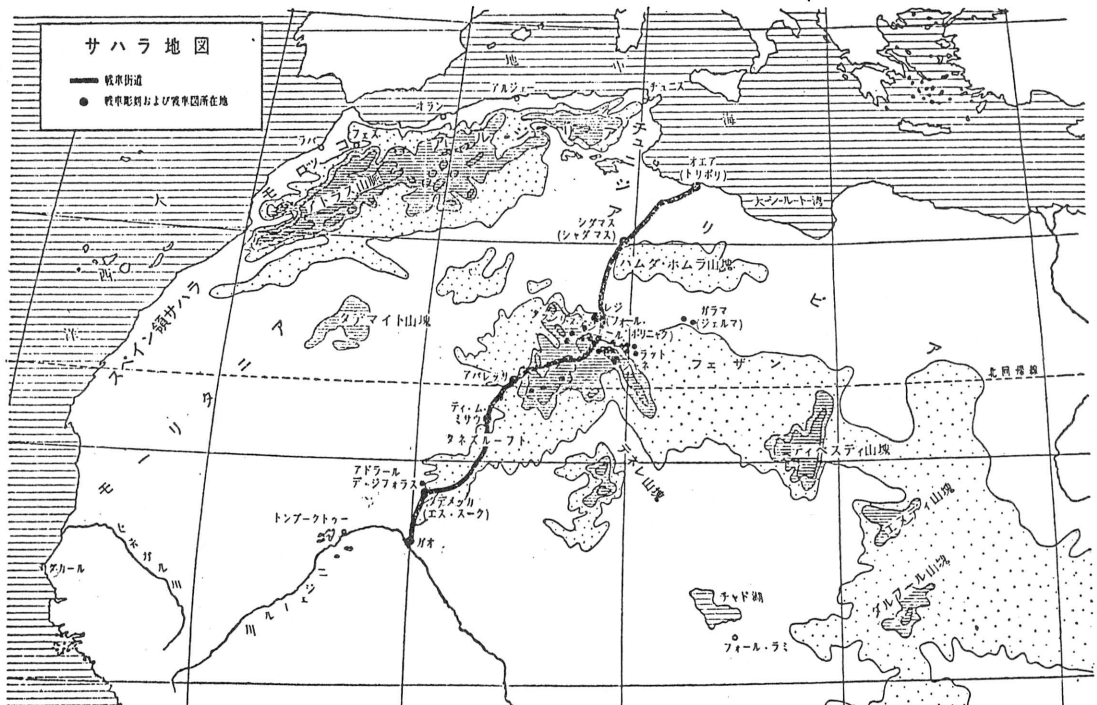


図1 「タッシリ遺跡 サハラ砂漠の秘境」H.ロート著 永戸多喜雄訳 毎日新聞社 1960より

ティムミサウの Tim-missau (5), アドラル・デ・イフォラスの Arl : (1)の各地を通過し、ニジェール川に到達したというのである。()内の数字は発見された戦車の岩絵の数を示す。

また、戦車の岩絵を結ぶもう一本のルートが西サハラを走っている。R・モニによれば Figuig, Djebel-Bani, Oualata, Tondia を通過しニジェール川に近い Goundam に達するという。⁶⁾

これらの戦車の岩絵には、赤いオーカーと磁土で描かれたものと岩面に刻まれたものがあり 一体いつ、誰によって、何のために描かれたのか諸説はあるが、その多くは謎にまつまされたままである。

岩絵の発見当初にはヘロドトスの「4頭立馬車で穴居エチオピア人(トログロデュタイ・アイティオペス)狩りをする」⁷⁾ガラマンテス族の記述に多くの人がその解答を見出そうとした。先述のゴージェも 戦車の岩絵を同時期に描かれたと推察される人物画 動物画との関連性を検討し、タッシリにおける、或る一定のヒエラルキーを持った政治、宗教 社会機構を伴った軍事王国の存在を示唆し、その習俗からは一部現在のトゥアレグを、またミケーネなどの古代地中海世界を想起させるものがあることを記し、これをガラマンテスと結びつけて考えている。⁸⁾

アフリカ大陸における馬の出現は、紀元前 1750 年頃、エジプトへのヒクソスの侵入時に求められる。ヒクソスに対する勝利の結果、馬はスエズ経由で導入され、第18王朝ファラオの時代以後、広範囲に使用されるようになった。⁹⁾(第18王朝以前には馬に関する記録はない。)ヒクソスのもたらした馬は、エジプト絵画の中に、北アフリカに現存する「バーバリー馬」とは異なったオリエント風特性をもって描かれている。しかし、サハラの岩絵に見られる、戦車を引く馬は明らかにこれと違った種的特性を示し、¹⁰⁾エジプトの影響力が、ナイル川の遙か西の彼方リビアに連なっていたことは考えられないことなどから紀元前18世紀以後のエジプトとの関連性は否定的にならざるをえない。

その後、戦車の岩絵に対する入念な検討が積み重ねられた。戦車を引く馬が四肢を前後に長く伸ばして、飛走(galop Volant)する特異な姿は、紀元前1200年頃のエーゲ文明後期のミケーネ美術の様式によく似ていることが指摘された。¹¹⁾H・

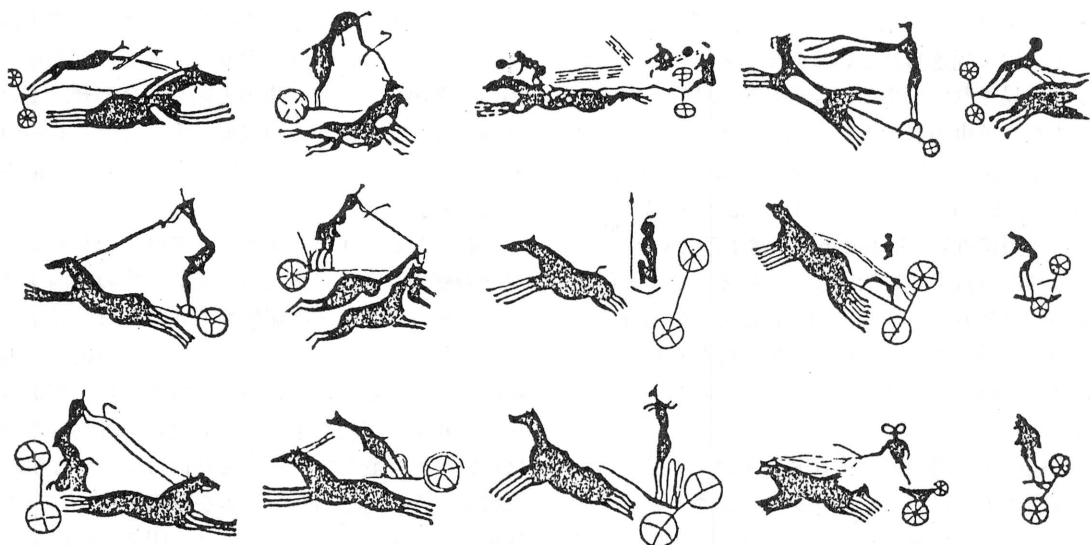
ロートは、紀元前1200年頃、いわゆる「海の民」がエジプトを攻撃し、その失敗により 先を西のリビアに向け、上陸先のリビア人との混血後、内陸に進出していった事実と照らし合わせ、この「海の民」に起源をもつ民族によって、これらの岩絵は紀元前1200年以後に描かれたものと推測している。¹²⁾

これに対してJ・スプリュッテは、むしろラスコーの壁画などに見られる、先史時代の南西フランスの馬のタイプとの類似性(非常に背たけが低いことなど)から、「ヒクソス」「海の民」の両起源説をも否定し、これらの馬はヨーロッパからジブラルタル海峡を越えて、¹³⁾もたらされたものではないかと推測している。また彼は馬につながれた戦車とその連結のシステムを詳細に検討し、古代ギリシャ・ローマの戦車には、明確に足場が設けられているのに対し、その戦車は事軸が直接御者の足場になっていること。そして古代ギリシャ・ローマのものは馬の肩甲骨の隆起のくびきに手綱が連結されているのに対し、その戦前の手綱は直接首につながれていることなどから、古代ギリシャ・ローマのものと明らかに異っていると指摘している。¹⁴⁾そしてサハラの岩絵に描かれた馬と戦車はすべて様式的に共通性が認められ、古代にサハラ中央部に、地中海、オリエント文明とは結びつかない文化的に進んだ人々の存在が考えられるとも述べている。¹⁵⁾

以上のように、現段階においては、戦車の岩絵が描かれた年代、描いた人々、描かれた人々、その描写の目的などに関して特定することは極めて難しい。ここでは諸説の共通項を拾い上げることにより、年代的にはヘロドトスの時代、紀元前5世紀半ばよりかなり以前に遡るものであること。

また描きかつ描かれた人々はやはり、その出自に関しては論議の別れるところであるが、すでにこの頃までに独特の文明を作り上げ、後のローマ時代に交易活動に関わりを持ち始める、ガラマンテスと呼ばれる人々であることを暫定的に想定せざるを得ない。このガラマンテスが、現在のベルベル族の祖先につながる可能性も十分に考えられよう。¹⁶⁾しかし、このベルベル系の人間たちが、ヘロドトスの時代の前後に、サハラ砂漠を舞台に交易活動に携っていたという証拠は、今のところ何も発見されていないに等しい。

図2 戦車の岩絵（原色は黄土色）と発見地 アンリ・ロート Route Antique du Sahara central. 1951より



上段左から Tamajert, Ahararar, Djorat, Tim-missaou, Ti-m-missaou.

中段同じく Tamajert, Ahararar, Djorat, Djorat, Ti-m-missaou.

下段 " Tamajert, Tamajert, Djorat, Tiror, Ti-m-missaou.

2. ヘロドトスとフェニキア人

さて、先述のヘロドトスの記述の前後にはリビア内陸部の地勢、住民、種族の分布についての情報が見られる。

それによると、リビアの奥地は野獣棲息地帯であり、その先には砂漠の台地が、エジプトのテーベから「ヘラクレスの柱」まで続き、その台地には、10日間の行程の間隔で、堆積した塩と、吹き出す美味な水があるという。まずテーベから10日行程の間隔を経て、アンモン人の土地があり、続いてアウギラ、ガラマンテスの住む地、アタランテスという種族の住む地、そしてアトランテス人の住むアトラスという山があるという。¹⁷⁾

これらの種族名、地名にそれぞれ現在の地名を当てはめる試みは、R・C・C・ロウらによってなされている。¹⁸⁾

それによるとアンモン人の土地は Siwa のオアシス¹⁹⁾、アウギラは Audjila (Djalo) のオアシスを示している。これが当時の砂漠の北限にあるオアシスラインを形成し、Audjila の後、オアシスラインは砂漠を横切り、南西に向かうとされる。10日行程のところには、プリニウスやプトレマイオス²⁰⁾によって記されたガラマンテスの首都Garama (Djerma) が存り、その次のアタランテスは、Garama から約 300 km、歩いてほぼ10日の位置に

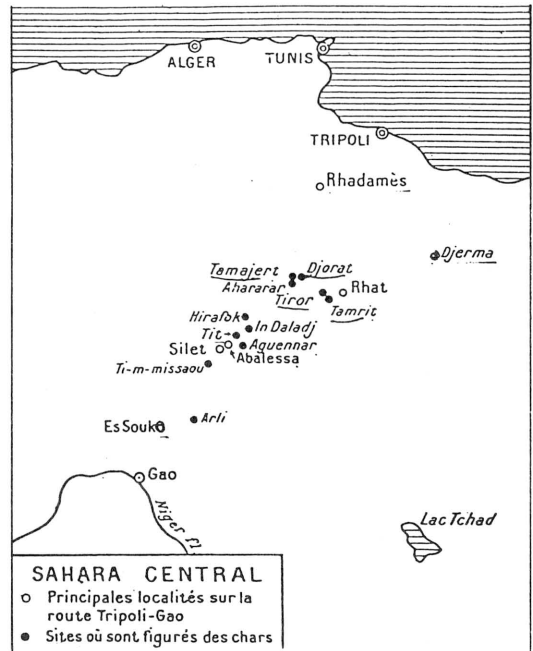
あるタッシリ・ナジールに住む住民を指し、さらにアトラス山はホガール台地を示すのではないかと²²⁾いう。このヘロドトスの説明を以上のように置き²³⁾変えてみるとホガール台地までの砂漠縦断ルートは、ほぼ現在のそれに対応する。また有名な、ナサモン人の話の中に出てくる、ワニの姿が見える西から東へ向かって流れる大河をニジェール川と見たてることによって、地中海沿岸からニジェール川までの砂漠縦断ルートが再構成出来ることになるというのである。²⁴⁾ヘロドトスの記述と現在の地名の対応関係は、現在のところ全くといってよい程立証されていないので、多くの無理もあり、仮説の域をいまだに出ることはないが、これらは先述の、地中海側のトリポリタニアから、ニジェール川北部のアドラル・デ・イフォラス間に点在する戦車の岩絵を結ぶ、サハラ中央部のルートにほぼ重なり合う。重要なことは 仮にこのルートがこの小論のテーマである交易ルートではなかったとしても、また単に2頭立て、もしくは4頭立ての馬車の引く戦車だけの交通路としてしか考えられないとしても、ヘロドトスの時代を遥かに遡る時代から 地中海世界とニジェール川を結ぶサハラ砂漠を越えた往来が、かなりの頻度で実施されていた可能性は極めて高いということであろう。

またヘロドトスの時代以前には、地中海世界ではフェニキア人による植民都市の建設が盛んに行われたことは周知の事実であろう。フェニキア人たちは紀元前9世紀後半のカルタゴの建設によって、その足場をさらに堅固なものにする。商才にたけたフェニキア人たちは、彼らの築いた植民都市に拠点をおいて、サハラ砂漠を越えた西アフリカ内陸部との交易に直接、時にはガラマンテスなどの砂漠の部族を仲立ちとして間接的に関わりを持ったことは容易に想像される。砂漠を越えて北から南へもたらされた商品は、土器、ガラス器、金属製品などフェニキアの手工業製品であり、南から北へもたらされたものは塩、象牙、獣皮、奴隷などが考えられる。その交易ルートの終着点でもあった「フェニキアの植民都市は、チュニアの平野の穀物農耕に支えられつつ、この交易による利益で繁栄した²⁶⁾」ことは十分に考えられるが、残念ながらこれを実証する文献的、考古学的な証拠は現在のところ全くない。またカルタゴの人間が「ヘラクレスの柱」の外で、おそらくモロッコの北西海岸に沿って航海し、その沿岸の住民と、商品と金を交換するいわゆる「沈黙交易」を行っていたことがヘロドトスによって記されている²⁸⁾。しかし、J・T・スワントンは、紀元前146年ローマによるカルタゴ滅亡後、この金という魅力のある商品をめぐるこの交易が、ローマによって引き継がれなかった点に着目し、これらはカルタゴが紀元前5世紀から4世紀にかけて、スペインを開拓し、そこから産出する金の方が利益を上げることが出来たので、紀元前3世紀の終りには、すでに西アフリカとの金をめぐる交易は停止されていたのではないかと論じている²⁹⁾。同じ頃、カルタゴは地中海世界に進出してきたローマとその覇権を競いはじめるが、紀元前146年の第3次ポエニ戦争において完璧な敗北を喫し、北アフリカのカルタゴの勢力の及んでいた世界は、漸次ローマの支配に組み込まれていく。

3. 「戦車の岩絵」ルートに点在する古代ローマの遺跡

H・ロートは前掲の論文の中で³⁰⁾、サハラ中央部の戦車の岩絵を結ぶルートに沿って点在する古代ローマ時代の遺跡として、次の8ヶ所をあげている。(第3図および第5図参照)

図3 中央サハラの古代ルート



SAHARA CENTRAL
○ Principales localités sur la route Tripoli-Gao
● Sites où sont figurés des chars

ROUTE ANTIQUE DU SAHARA CENTRAL
L'Encyclo. mes. d'outre mer H.ロート 1951より

1) Fezzan の Djerma

ヘロドトス以来、古代ローマ時代に至るまでのガラマンテスの首都 Garama. 45000にのぼる墓を擁した。古代の大墓地がある³¹⁾。

2) Rhadames (Ghadames)

古代ローマ時代の Cydamus. アフリカ生れの皇帝セプティミウス・セウエルス(193~211)とカラカラ帝(212~217)の守備隊の駐屯地で、現在は残っていないが、セウエルス・アレキサンダー帝(222~235)時代には砦が構築されていた³²⁾。

3) Rhat (Ghat)

古代ローマのガラスの壺が発見されている。

4) Tassili の Ihérir

現在のサハラ住民の建築物と全く共通性がなく、付近に障害物のない台地上にあり、峡谷の入口を監視出来る場所にある Ikakaden の遺跡。(7部屋の仕切り壁の長さが同じで、古代ローマ時代の測量尺度に一致している。)³³⁾ また付近からはローマの貨幣が出土。

5) Hoggar の Ti-n-Hinane

1926年から1933年にかけて、M・レグーアスらによって発掘。コンスタンティン銅貨と、紀元後3世紀前半のものとされるローマ

のランプと壺が出土。³⁵⁾ 周囲が完全に平面である見張り台のような地に建てられ、大小11の部屋からなる軍事的構築物と推定される。収容人員は80～90人。狭い通路の通じた壁の厚さ1 m 40 cmの居住に適さない部屋は牢獄、地下へ掘り下げた入りにくい部屋は外人部隊の兵士の仕事に対する報酬の保管所と考えられる。Djermaの遺跡の壁と長さ、幅などが完全に一致している。³⁶⁾

6) Hoggar の Tit

7) Hoggar の Silet

同時代に構築されたと思われるカスバの跡。古代ローマ時代のものである証拠はない。しかしここから約200 km、馬で3日、ラクダで4日行程の Tim-missau では、古代の貨幣が発見されている。³⁷⁾

8) Adrar des Iforas の Es-souk, Taholas.

初期のアラブ人旅行者、イブン・ハウカル(977)、エル・ベクリ(1067)の記述に見られるスーダン・ベルベルの古代の首都タデメッカの遺跡。Es-souq はアラビア語で市場の意味。主要地区では20世紀半ばより遺跡の詳細な研究が進められているが、1つのモスクの周囲に家々が立ち並んでいること、また墓の特色などから明らかにイスラム時代のものとされる。³⁸⁾ H・ロートはこの遺跡に近い、付近の峡谷にある、Taholas の古い遺跡に前イスラム期の特色を見出ししているが、これも古代ローマ時代のものである証拠はない。

以上のことから、デジャルマ、もしくはラダメスからラート、タッシリを経てホガールまでは古代ローマ時代に、多少なりとも、このサハラ中央部の砂漠縦断ルートに沿った往来があったことはうかがわれるが、そこから先、古代ローマの人々がアドラル・デ・イフォラスを経て、ニジェール川に到達していたかどうかは、現時点におけるサハラの遺跡、出土品の発掘状況からは明らかではない。

4. ガラマンテス

さて、ヘロドトス、プリニウス、プトレマイオスらによって記されたガラマンテスは、古代ローマ時代に一体どのような役割を演じたのだろうか。カルタゴ滅亡後、北アフリカへの進出を果たした

ローマは、この北アフリカの治安の維持のため、一連の砂漠の部族との戦いを続けねばならなかった。後述のアウグストゥス帝時代(紀元前27年～紀元後14年)の地方総督C・バルバスの遠征(紀元後19年)の目的も、ガラマンテスをも含めた、この砂漠の部族の反乱の抑制、または懲罰にあったとされる。³⁹⁾

紀元後22年には、ガラマンテスはタクファリナスの反乱に加担し、レプティス・マグナを襲う際の後盾となり、24年にはガラマンテスの王はこれを封助するため、分遣隊を派遣したが、同年タクファリナスの敗死後、ローマに和平を求め、使節を遣わしている。⁴⁰⁾

その後、再び交戦状態となり、ヴェスパシアヌス帝時代(69～79)の70年には地方総督セプティマス・フラックスが、おそらく、このガラマンテスに支援されたナサモンの反乱の鎮圧のためサハラ中央部へ遠征し、またドミティアヌス帝時代(81～96)の86年には、ジュリアス・マテルナスがガラマから南へ、ガラマンテスの王を伴ってエチオピアに達し、ここで犀を捕えたことが記録に残されている。⁴¹⁾ 後者からは、ローマとガラマンテスとの間に再度、友好関係がつくり出されていたことが推定されよう。ただしこの二人が、サハラ中央部のどのルートを通り、どこへ行き着いたのかは、プトレマイオスの記述があまりにも短いので不明である。

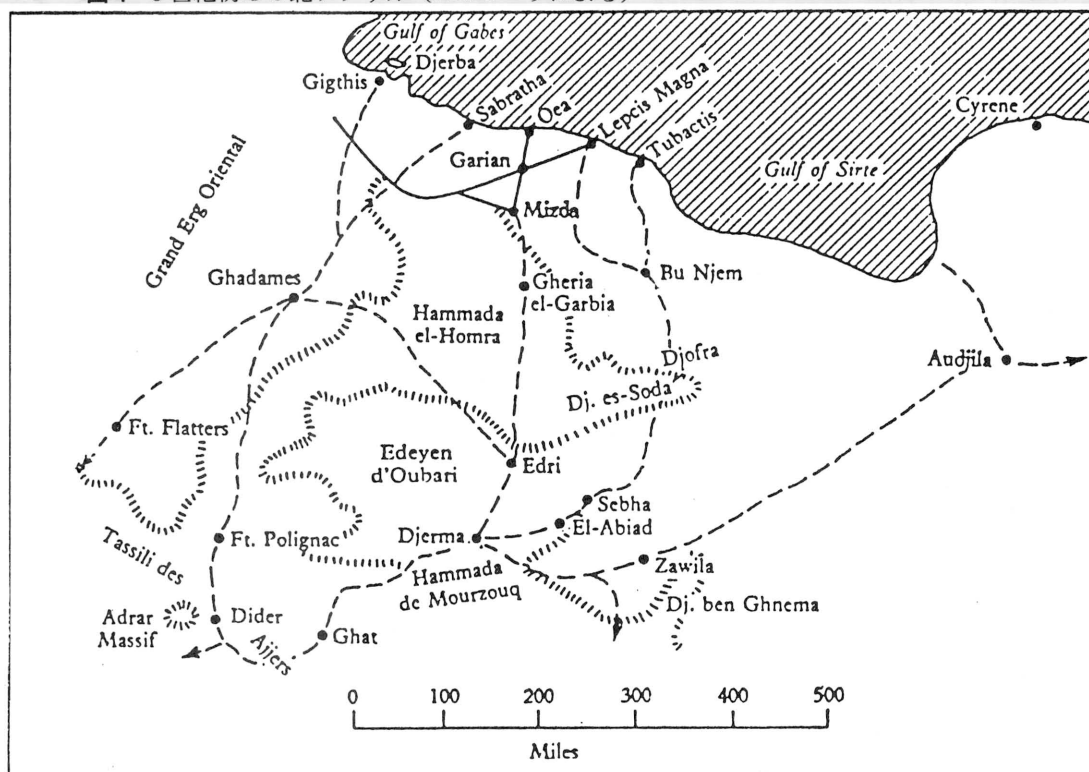
しかし、3世紀初めには、先述のアフリカ生まれの皇帝セプティミウス・セウェルス(193～211)がトリポリを脅かす好戦的な部族(ガラマンテスを含む)に対して出征し、常に南方を監視し、恒久的な防備体制を整えるために Ghadamus (Rhadames), Gheria-el-Garbia, Bu-Njem の3ヶ所に砦を構築する。⁴²⁾ (図4参照)

これ以後、再びローマとガラマンテスは、友好関係を回復したことが推定される。

古代ローマ時代に、トリポリを出発点とする3本のキャラバン・ルートはそれぞれこの3ヶ所の砦を通過し、ラートに至る。途中の井戸のある地点を結び、これらはほぼ、現代のキャラバン・ルートと一致する。⁴³⁾

1世紀後半から4世紀にかけて、多くのローマ人技術者、商人たちが、ガラマンテス人の居住地に移り住み、ローマ様式の灌漑体系を整備し、ラ

図4 3世紀初めの北アフリカ (R.C.Cロウによる)



ソブ、陶器、ガラスなどの商品をもたらした。⁴⁴⁾フェザンからラートにかけて数多い墓地から、これらが大量に発掘されているので、前述のガラマンテスとローマの友好関係の変転に対応しながら、これらの商品が輸入されていたことは確実であろう。すなわち、これらの交易活動は1世紀後半に始まり、3世紀半ばに最盛期をむかえ、4世紀以降、ローマの北アフリカでの支配体制の弱体化と共に崩壊したと考えられる。⁴⁵⁾ガラマンテスの地からは、ローマに向けて輸出された商品として、象牙、奴隷、獣皮などが考えられるが、これらについては後に検討を加えてみよう。ただし、Carbunculi と呼ばれる紅玉的な宝石が、ガラマンテスからカルタゴへ、次いでローマにもたらされていたことはプリニウス、ストラボンによって記述されているので、その真実性はかなり高いと見なさねばならない。⁴⁶⁾

上記のように、ガラマンテスは現在の段階では、その経済的貢献度を推し測るのは難しいが、古代ローマ時代に、サハラ砂漠縦断の交易活動に直接、間接に関わっていた唯一の集団であることはほぼ間違いないであろう。

5. C・バルバスの遠征ルート

さて、再び古代ローマ帝政時代初期に遡るが、先述のプリニウスによって記された。アウグストゥス帝時代の地方総督、C・バルバスは、どのようなルートを辿って、サハラ中央部への遠征を行ったのだろうか。この再追跡は古代ローマ人がサハラ砂漠をどのあたりまで南下していたのかを推し測る一つの目安となろう。

プリニウスによれば、⁴⁷⁾C・バルバスはSabratha (現在のトリポリあたり)を出発し、Cidamus (Gádames)を経て南に向かい、東西に伸びたAter山を越えた。この山とその先の砂漠の彼方に、ガラマンテスの町、Matelgae、そしてDjerma (Garama)があり、Debris (水源地)がある。そしてTabidium (町)、Niteris (国)、Milgis-gemela (町)、Bubeium (町、もしくは国)、Epini (国)、Thuben (町)、Mons Nomine Niger. (山)、Nitibrum (町)、Rapsa (町)、Discera (国)、Debcri (町)、Flumen Nathabur (川)、Tapsagum (町)、Tamiagi (国)、Boin (町)、Pege (町)、Flumen Dasibari (川)、そしてBaracum, Buluba, Alasit,

Gulsa, Balla, Maxala, Cizama (以上町), 宝石の産出するという Mors Gyri (山) などの国と町, および山や川を通過していたとされる。⁴⁸⁾

Gadames の南に位置し, 東西に長く伸びているという Ater 山は, 現在の Hammada-el-Homra に一致する。⁴⁹⁾ この山とその先の砂漠の彼方にはガラマンテスの町 Dierma がある。Gadames から南東に Hammada-el-Homra を越えて, Djerma に至る道は, プリニウスによって, ヴェスパシウス帝の時代 (69~79) の 69 年に, わずか 4 日行程に短縮されたルートが, 新しく発見されたと記されている。これがどのルートかは明らかではないが, R・C・C・ロウは Gheria-el-Garbia (現在の Gariyat) から, Edri (現在の Idri) へ至る, Hammada-el-Homra を南下する直線ルートのことではないかと推定している。⁵⁰⁾ (図 3 参照)

H・ロートは, プリニウスが挙げた上記の C・バルバスが通過したという町のいくつかを, 現在の名称に置きかえようと試みているが, それによると, Tabidium = Thabudeous (現在の Thouda), Milgigemela = Mili-Gemellae (現在の Bel-Haroug), Thuben = Thubuna (現在の Tobna), V(D)iscera = Vescera (現在の Biskra), Maxala = Mascala (現在の kherchela) などが, それぞれ該当するとしている。これらの小さな町は, すべて Theveste 付近に見出され, ローマ軍はここを基地にして南下を始めたというのである。そして特に, Alasit と Galsa に注目し, 前者にタッシリ・ナジールの北面 Ighargharen の谷にあり, かつてのフランス軍の哨所フォト, ポリニヤックのあった Ilezi を, 後者には, 先述のホガールにある Tin-Hinane の遺跡に近い Abalessa を当てはめている。⁵²⁾ (図 5 参照) ただし, 後者については, R・C・C・ロウは, この地名解読を単なる推定の域を出ないものとし, Balsa は Galsa が変じた Balla に由来するものと反論を加えている。⁵⁴⁾ さらに H・ロートは Fleuve (Flumen) Dasibari について, Da-isa-bari から, Da は古代ニジェールの住民「水の主」と呼ばれる人々を指し, Isa-bari はソンライ語の大きな川を意味し, これを継ぎ合わせた「Da の大きな川」として, ニジェール川を意味すると論じている。C・バルバスの時代に, ニジェール川中流域で, はたしてソンライ語が使われていたのかどうか疑問視されるが, 当

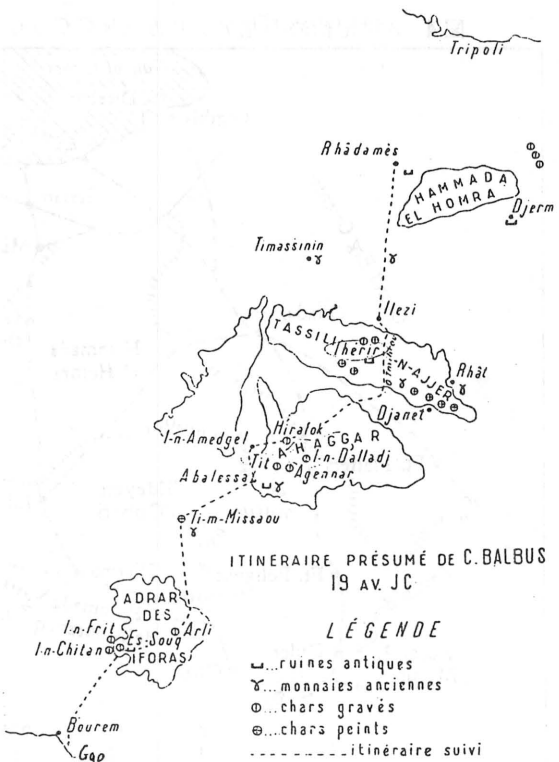


図 5 H・ロートによるルート図

時使われていた沿岸民の言語が, ソンライ語の中に融合した可能性は十分に考えられる。H・ロートは, この仮説の上に立って, C・バルバスの率いるローマ軍は, Ghadames からサハラ砂漠を真直ぐに南下し, 約 500 km の地点にある Ilezi を通過し, ここからタッシリ・ナジールの岩の台地を縦断し, さらにホガールの台地を北東から南西に向かって通過し, タネズルフト, アドラル・デ・イォラスのタデメッカ, そしてニジェール河畔に達していたとする (図 5 参照)。また, その後タッシリ・ナジールの岩の台地を通過する際, Oued Imihrou と呼ばれる涸れ川に沿って, 台地を縦断し, Tin-Tiradjeli のコルを通過して下っていくルートが, 長い模索を経て選定される。これが, 先述のヴェスパシウス帝時代に, 4 日行程に短縮されたというルートを指しているのではないかと推測している。⁵⁶⁾ このトリポリからガダメスを経てタッシリ・ナジール, ホガール, アドラル・デ・ジフォラスを通過するルートは, 彼も含めた数人の研究者によって提唱された。前述のサハラ中央部の戦車の岩絵を結ぶルートにはほぼ一致する。

ただし古代ローマ時代のものと思われる Ti-n

-Hinane の遺跡に近いホガールの Abalessa, もしくは古代ローマ時代の貨幣が発見されたタネズルフトの Ti-m-Missaou まではともかく, ここから先は, 古代ローマ時代のものは何も残されておらず, ローマ人たちがニジェール河畔に達していたとは, にわかに断定し難い。また H・ルート自身も認めているように, 進軍先至るところに, その記念碑として残したローマ軍の碑文が, このサハラ中央部では, 現在のところ, 全くといっていい程発見されず,⁵⁷⁾これがローマ軍のサハラ侵攻を否定する要素としてよく引き合いに出される。しかし, これは将来にわたって発見される見通しは全くないということの意味していないので, これでもってその可能性を否定することは, 速断のそしりをまねがれないであろう。

仮に, C・バルバス率いるローマ軍が, ニジェール河畔に達し, その後継者たちが, サハラ中央部を北東から南西に至るこのルートの大筋を踏まえながら, さらに部分的に, より容易に, 早く通過出来るルートを模索しながら南下していったとすれば, そのめざすところは一体何であったのだろうか。

C・バルバスの遠征は軍事的な色彩が濃く, 砂漠の部族に対する反乱の抑制, または懲罰にあったことは前に述べたとおりであるが, 彼ら, もしくはその後継者たちをサハラ中央部からニジェールへの砂漠を縦断する困難な旅へ駆り立てたものは, 単なる冒険精神や, 地理的関心ではなく, ローマ人たちはその時代における可能性と限界のなかで, サハラの彼方からやってくる商品を求め, かつその輸送に必要なキャラバン・ルートの掌握と安全を求めていることも考えられよう。⁵⁸⁾H・ルートはアドラル・デ・ジフオラスにあるタデメッカが北方からやってくるキャラバンの重要な到着地とし, その付近にあったとされる塩山からもたらされる岩塩の倉庫を有し, 周辺の遊牧民たちが家畜をつれて, 交換取引にやってくる交易センターではなかったろうか,⁵⁹⁾また, おそらく彼らを誘導する付近の事情に詳しいガイドの手引きにより, すでに, さらに南の大河, その背後にある黄金の国, 象牙と奴隷の国についての情報をかなり持ち合わせていたのではなかったろうか, と想像をめぐらしている。⁶⁰⁾

6. 古代のサハラ砂漠縦断交易活動

さて最後に, 以上述べたような内容を前提として, この小論の本題である, 古代において, サハラ砂漠のキャラバン・ルートを往き来していたとされる交易活動について, 検討を加えてみることにしよう。この交易活動に携わっていたと考えられる人々は, まず, サハラ中央部を北東から南西に貫くルートに点在する, 戦車の岩絵を描き, また描かれたと考えられる, ヘロドトスの時代よりはるか以前に, 独特の文明を築き上げていたガラマンテスと呼ばれる人々。これらは現在のベルベル系の祖先につながると考えられよう。第2に紀元前9世紀後半, 植民都市カルタゴの建設以後, ヘロドトスの時代を経て, ローマにその支配権を奪われる紀元前2世紀半ばまで, 西アフリカ内陸部との交易に直接に, 時にはガラマンテスなど砂漠の部族をなかだちとして間接的に関わりを持っていたとされるフェニキア人。そして第3に, 紀元前2世紀半ばから紀元後5世紀初めまで, やはり主としてガラマンテスを仲介として, サハラ交易に関わっていたとされる古代ローマ人の三者であろう。

しかし, 前二者は前述のように, その交易活動を実証する文献的, 考古学的な証拠が, Carbuncle と呼ばれる宝石をめぐる, カルタゴとガラマンテスとの間にあった交易関係のみを例外として, 全くといっていい程見出されていないので, 現時点においては, 疑問符をつけたままの状態で温存し, その検証は将来に委ねなければならない。

したがって, ここで検討の対象となり得るのは, これも決して充分な資料, 証拠に恵まれているとはいえないが, ガラマンテスと関わりを持ちながら, 推し進めていたとされる古代ローマ人による交易活動に限定されよう。

紀元前146年カルタゴの滅亡後, 北アフリカに広大な領土を獲得したローマは, 当然のことながら, その地の生産物の恩恵をこうむることになった。ローマ元老院によって「アフリカ州」Provincia Africa という名称を与えられたこの地では, 小麦, 大麦, オリーブなどの豊かな農業生産が可能であり, アウグストゥス帝時代の「パンと見せもの」の政策以来, ローマ市民の多くが, このアフリカ州とエジプトからもたらされる小麦の配給制によって食生活を支えられていたことは周知の事実である。このローマン・アフリカ州の

繁栄は、現在のチュニジアに点在する Dougga, Maktar, El-jem などの荘麗な古代ローマ時代の遺跡に、その思影をしのぶことが出来る。1世紀後半には、ローマの諸都市の食糧の必要量の3分の2までが、このローマン・アフリカ州を中心とした北アフリカからもたらされたものであるとする、あるユダヤ人歴史家の記述も残っている。⁶¹⁾

この北アフリカの繁栄の、少なくとも一部が、ガラマンテスを仲介としたサハラ砂漠縦断交易によって、サハラ中央部、或は西アフリカ方面にもたらされたかどうかを実証することは、現在のところ極めて難しく、またその逆方向、すなわちサハラ中央部、或は西アフリカ方面からもたらされる商品に対するローマン・アフリカ側の需要が充分にあり、かつそれによって、古代ローマ帝国の市場は多大な経済的影響を受けたかどうかという点に関しても、事情は同じである。

後者の方向に対しては、J・T・スワントンはかなり否定的な見解を示している。⁶²⁾それによると、対象となる商品は、やはり前述のように、象牙、奴隷、獣皮、ダチョウの羽根などが主なものである。しかし、象牙はローマでは、その大部分がアジア方面からもたらされ、北アフリカからはモリタニア、ヌミディアからよく輸出され、わざわざサハラの南にそれを求める必要はなかったこと。奴隷に関しても、古代ローマ時代の人種分布自体が不明であり、黒人奴隷がいたとしても、それが西アフリカからもたらされたものとは限らないこと。⁶³⁾獣皮やダチョウの羽根については北アフリカ自体が、このころはまだ多大な動物資源の宝庫であり、同じく砂漠の南に求める必要がなかったこと。また後のサハラ交易の目玉商品となる金についても、前述のようにスペイン方面から供給されたので、西アフリカの金に対する需要もなかったはずであることなどを論じている。

であるので、先にも触れたとおり、ローマがガラマンテスを仲介として、輸入していた商品は、これだけがカルタゴ時代のフェニキア人たちも扱っていたものとして、Carbuncle と呼ばれる紅玉的な宝石に限られる。これらは非常に高価なもので、小さなものでも40ステタス(古代ギリシャの金貨の名)の価格がつけられ、⁶⁴⁾プリニウスによれば、カルタゴ時代には、カルタゴの富の源でもあったとされている。⁶⁵⁾またストラボンも、この宝石の原産地が、ガラマンテスの土地であると記し

ている。⁶⁶⁾プリニウスはこの宝石の産地を Mont-Giri と記しているが、これがどの場所にあたるのかは明らかではない。そして、タッシリ・ナジュールにいたとされる Trogodytae (ヘロドトスの言エチオピア人)について記述している文章のなかで、これらの宝石は、エチオピアから輸入されていると論じている。⁶⁷⁾プトレマイオスがJ・マテルナスの遠征について、彼がガラマンテスの王を伴って、エチオピアへ出征し、4ヶ月後 Agisymba に到着し、サイを捕獲したことを記しているのは先にも述べたとおりである。この当時、エチオピアとは、おそらくサイの棲息するサバンナを含めたスーダン全体を指す呼称であり、現在のエチオピアとの継がりを解明することは不可能に近い。⁶⁸⁾⁶⁹⁾R・C・C・ロウはガラマンテスがスーダン方面で産出する Carbuncle に対しては、塩、穀物、デーツなどの物資と交換したり、時には略奪に及んだりしていたので、現在のところ、スーダン方面での貨幣の未発見は、これらに帰因していると推測しているが、これを裏付ける証拠は今のところ何もない。⁷⁰⁾いずれにしても、この Carbuncle が、それほどローマの経済市場を潤おしたのかを推し測ることの出来る記述は見られないので、この Carbuncle に関する取引も、かなり限定されたものとみなさざるを得ない。

これらの主として、文献的な資料に基づく考察と、サハラ中央部の戦車の岩絵を結ぶルートに沿って点在する古代ローマ時代の遺跡と思われるもの、もしくはその周辺からの出土品(ランプ、壺、貨幣など)、フェザンからガートにかけての、ガラマンテスの居住地、もしくは活動領域での、イタリア隊による考古学的な発掘の結果を⁷¹⁾総合してみると、古代ローマ時代におけるサハラ中央部、もしくは西アフリカ方面との交易活動は、現時点においては、ニジェール川中流域にまで、その適用範囲を広げることは難しく、フェザン地方からホガールのあたりまでに限定され、またそれも、それほど積極的かつ大規模なものではなく、どちらかといえば制限された(例えば個人的需要に基づくものなど)範囲内においてのみ、実施されていたと結論づけられるのではないだろうか。

ただし、ヘロドトスの時代を遙かに遡る、岩絵に描かれた戦車を結ぶルート、ヘロドトスの記述、紀元前19年のC・バルバスの遠征についてのプリ

ニウスの記述から読みとれる、さまざまな可能性は、これらの結論が、将来においても、そのまま固定されるとは限らないことを暗示している。

さて、4世紀後半から、北アフリカでのローマ支配は、ベルベル族による反乱のため衰退気味となり、⁷²⁾ 395年のローマ帝国東西分裂後、アフリカの五属州はテオドシウス帝の子、ホノリウス帝統治下の西ローマ帝国に属することになる。やがて、このベルベル族はジブラルタルを渡って北アフリカに進出してきた、ゲルマン系のヴァンダル族と同盟を結び、ローマの支配をくつがえしていく。⁷⁴⁾

6世紀初めには、ビザンチン（東ローマ）側のユスティアヌス（527～565）帝時代、名将ベリサリウスが再度ベルベルと同盟を結び、ヴァンダル族の支配を一掃する。しかしベルベル族は、このビザンチン軍に対しても反乱（543～558）を起し、鎮圧される。北アフリカでの交易活動は、

注

- 1) LHOE, H. 『タッシリ遺跡・サハラ砂漠の秘境』 永戸多喜雄訳 毎日新聞社 1960年. p. 18
- 2) GAUTIER, E. F. 'Anciennes voie de Commerce transsaharien', Stockholm Geogr. Annal Vol. Sven Hedin pp. 550～562 1935
- 3) GRAZIOSI, 'L' arterupestre della Libia. Naples 1942 t. I, p. 91
- 4) LHOE, H. 前掲書 p. 140
- 5) LHOE, H. 'Route antique du Sahara central', L' Encyclopédie mensuelle D'outre Mer pp. 300～305 1951
- 6) MAUNY, R. 'Une route préhistorique à travers le Sahara occidental'. Bull. I. F. A. N. pp. 341～357 1947
- 7) ヘロドトス『歴史』 卷4 183 松平千秋訳 筑摩書房 p. 223 1967
- 8) GAUTIER, E. F. 前掲論文
- 9) 旧約聖書『創世紀』 41～43, 45～21, 50～9. などに馬につながれた戦車についての記述が見られる。e. g. MAUNY, R. 'Tableau géographique de l'ouest africain au Moyen âge, Mem. I. F. A. N. (DAKAR) p. 283 1961
- 10) SPRUYTTE, J. 'Le cheval de l'Afrique ancienne, Le Saharien No. 48 1er trimestre

これからしばらく、ビザンチンの影響下におかれることになる。フェザンで発掘された墓から発見された6～7Cの初期ビザンチンの陶器からは、ビザンチンとガラマンテスとの間の交易が再開されたことを、また Zawila などに残る、強固な都市壁や、ビザンチン様式のドーム状墓は、この方面にビザンチンの影響力が及んでいたことを物語っている。⁷⁶⁾

ビザンチンの北アフリカ支配は、やがて639年アラブ人の来襲時に崩壊し、666年、フェザンの、Waddan, Djerma, Kawar などが略奪され、古代ローマ、ビザンチンとの継がりを持った交易活動はここに終焉を迎えることになる。⁷⁷⁾

アラブ人が、サハラ砂漠を越えてスーダン方面に侵入し、本格的な金をめぐる交易が、始められるのは、この数十年後である。

pp. 32～42 1968

- 11) 12) LHOE, H. 『タッシリ遺跡』 前掲訳書 p. 142
- 13) SPRUYTTE, J. 前掲論文
- 14) 15) Ibid.
- 16) PHILLIPSON, D. W. 'African Archeology, 1985, 『アフリカ考古学』 河合信和訳 学生社 p. 204 1987
- 17) ヘロドトス『歴史』 卷4. 184 前掲訳書 p. 223
e.g. BUNBURY, E. H. A history of Ancient Geography 1879. Vol. I pp. 262～317
e. g. 『古代地理学史の研究—ギリシャ時代—』 織田武雄著 1959 柳原書店 pp. 143～163
これらの2つの著書は、アンモニウムからアトランテスを、東西に伸びる線に沿って点在するオアシスとしてとらえている。
- 18) LAW, R. C. C. 'The garamantes and trans-saharan enterprise in classical times, Journal of African History VIII. 2 pp. 181～200 1967
- 19) 「古代地理学史の研究」 織田武雄 p. 155
- 20) P. Linii 'Naturalis' Historia. Loeb
『プリニウスの博物誌』 I 卷5～36, 38, 43, 45 中野定雄他訳 雄山閣出版 pp. 215～217 1986
- 21) CLAUDI PTOLEMAEI Geographia, 1, 8～4 『プトレマイオス地理学』 1986 織田武雄監

- 修 中務哲郎訳 東海大学出版会 pp. 5 ~ 7
pp. 72 ~ 73
- 22) L'HOTE, H. 'L' expedition de Cornelius Balbus au Sahara en 19 av. J. C. d'après le texte de Pline., Revue Africaine Alger txc VIII pp. 41 ~ 83 1954
- 23) LAW, R. C. C. 前掲論文
- 24) ヘロドトス 『歴史』 巻2 - 32 前掲訳書 pp. 80 ~ 81
- 25) LAW, R. C. C. 前掲論文
- 26) PHILLIPSON, D. W. 'African Archeology, 1985 前掲訳書 p. 206
- 27) BOVILL, E. W. 'The Golden Trade of the Moors, Oxford 1958
この本では、フェニキアの富の存在自体が、この時代のサハラ交易の存在を証明していることを論じているが、文献的考古学的な裏付けがない。
- 28) ヘロドトス 『歴史』 巻4 196 前掲訳書 p. 226 カ・ダ・モストも、同様のことを述べている『航海の記録』 大航海時代叢書 岩波書店 1967 p. 518
- 29) SWANTON, J. T. 'The myth of transsaharan trade during the Roman Age, Journal of African History Vo. 8. No. 4 NY pp. 582 ~ 600 1975
- 30) L'HOTE, H. 'Route antique du sahara central,
- 31) Ibid. p. 302
- 32) LAW R. C. C. 前掲論文 p. 193
- 33) L'HOTE, H. 'L' expedition du Cornelius Balbus au Sahara en 19 av. J. C, p. 70
- 34) 35) 36) Ibid. p. 72 p. 78
- 37) L'HOTE, H. 'Route antique du Sahara central p. 304
cf. MAUNY, R. 'Monnaies anciennes trouvées en Afrique au Sud du limes de l'empire romain, C. I. A. O. No. IV vol. II pp. 51 ~ 70 1951
- 38) L'HOTE, H. 'Sur l'emplacement de la ville de Tademekka antique capitale des berberes soudanais, Notes Africaines No. 51 VII pp. 65 ~ 69 1951
- 39) LAW, R. C. C. 前掲論文 p. 190
- 40) TACITUS, C. 'Annales, タキトゥス「年代記」 巻3 - 74 巻4 - 23, 26 国原吉之助訳 岩波文庫 p. 236 pp. 263 ~ 264. p. 266 1981
- 41) 『プトレマイオスの地理学』 前掲訳書 第1巻8章4. p. 5
ユリウス・マティルナスの遠征の年は、H. L'HOTE 'L' Expedition de Cornelius Balbus au Sahara en 19 av. J. C.' に依る。
- 42) LAW, R. C. C. 前掲論文 p. 193
- 43) L'HOTE, H. 'Route antique du Sahara Central, p. 302
- 44) 45) LAW, R. C. C. 前掲論文 p. 195
- 46) 『プリニウスの博物誌』 III, 前掲訳書 - 37 巻 92 ~ 97 pp. 1517 ~ 1518 この訳書では、Carbunculi を、カルタゴ紅玉と訳している。
JONES, H. L. 'The Geography of STRABO, VIII - 17, 3 - 19. The Loeb Classical Library p. 195 ~ 197
cf. SWANTON, J. T. 前掲論文 p. 588
LAW, R. C. C. 前掲論文 p. 187
- 47) 48) PLINY 'Natural History' The Loeb Classical Library. RACKHAM. H. V. 35 ~ 37 pp. 244 ~ 246
- 49) L'HOTE, H. 'L' expedition de Cornelius Balbus - , p. 47
cf. LAW, R. C. C. 前掲論文 p. 192
- 50) Ibid. p. 192
- 51) L'HOTE, H. 前掲論文 pp. 66 ~ 67
- 52) Ibid. pp. 66 ~ 67
- 53) Ibid. pp. 53 ~ 54 H. ロートは, Littré. (1840). Vivien de St. Martin 及び Berthelot, B. Pace らによる, 仏訳本に出てくる Galsa を Balsa に, 次の Balla を Galla に, 訂正して論じている。
- 54) LAW, R. C. C. 前掲論文 p. 190
- 55) 『永遠のサハラ』 西村滋人 立風書房 1982
この Ilezi を通過するルートを, 戦車の岩絵を求めつつ, 走破した貴重な記録である。
- 56) L'HOTE, H. 前掲論文 p. 69
- 57) Ibid. pp. 79 ~ 81
- 58) Ibid. p. 61
- 59) Ibid. p. 65
e. g. L'HOTE, H. 'Sur l'emplacement de la ville Tademekka. - . p. 67
- 60) L'HOTE, H. 'L' expedition de Cornelius Balbus - , p. 66
- 61) SWANTON, J. T. 前掲論文 p. 585
Josephus, Jewish War, in Josephus, II (9 vols, London, 1926 ~ 1965), II 紀元後 75 ~ 79 年に書かれたもの。

- 62) SWANTON, J. T. 前掲論文 p.592
- 63) Ostrich feather (ダチョウの羽根) は、19世紀末に、ロンドン市場での需要が高まり、サハラ縦断交易の主要商品の一つになる。
e. g. BAIER, S. 'Trans-Saharan trade and the Sahel, Damergu 1870 ~ 1930, Journal of African History XV Ⅲ — (1) pp.37 ~ 60 1977 に詳しい。
- 64) LAW, R. C. C. 前掲論文 p.187
- 65) 『プリニウスの博物誌』Ⅲ. 前掲訳書37巻—92 p.1517
- 66) JONES, H. L. 'The Geography of STRABO, VIII 17, 3. 19. 前掲書 pp.195 ~ 197
- 67) 『プリニウスの博物誌』Ⅰ 前掲訳書5巻34 ~ 35 p.215
- 68) プトレマイオス . 18. 4 41) に同じ。
- 69) GIBBON, E. 'The History of the Decline and Fall of the Roman Empire, 1776 ~ 1788. 『ローマ帝国衰亡史』 E. ギボン 中野好夫訳 1976 筑摩書房
ギボンも、エチオピアを、スーダン、西アフリカ全体を指す呼称として用いている。
- 70) LAW, R. C. C. 前掲論文 p.198
- 71) Ibid. p.194
e. g. Pace, Sergi and Caputo, 'Scavi Sahariari', Monumenti Antichi 1951, Coll pp.151 ~ 552. Sir M. Wheeler, Rome Beyond the Imperial Frontiers (London. 1954) pp.97 ~ 107
- 72) GIBBON, E. 『ローマ帝国衰亡史』 前掲訳書 第Ⅳ巻及び第Ⅴ巻 (朱牟田夏雄訳)
- 73) トリポリタニア。アフリカ・プロコンスル、ヌミディア、マウレタニア・カエサリエンシス、マウレタニア、ティンギタナを指す。°
- 74) 『ローマ帝国衰亡史』 前掲訳書 第Ⅴ巻
- 75) LAW, R. C. C. 前掲論文 p.199
- 76) Ibid. p.199
- 77) Ibid. p.199
(なんり しょうじ・甲南高校)